

私の「小確幸」

蔣 莉

教育学部 交換留学生 中国

村上春樹さんの著書「うずまき猫のみつけかた」で「小確幸」（しょうかつこう）という言葉が出てきました。小さいけれども確かな幸せという意味です。美しい言葉だと思います。去年の10月から今まで和歌山での留学生生活を述べると、すぐ頭に浮かぶ言葉は「小確幸」です。

私が和歌山で感じた「小確幸」は、和歌山の天気から話さなければなりません。和歌山で、最も気に入ったのは和歌山の天気です。ふるさとの冬のうっとうしい天気と違い、和歌山の冬はあたたかくて、晴れた日が多くあります。毎日9時半頃、自転車で学校に行く時には、日差しを浴びることができ、心が飛ぶように嬉しかったです。

また、学校の行き帰りの途中に、紀ノ川橋を通ります。橋から、広くて静かな水面を見ると、紀の川は非常に綺麗です。特に夕方、夕日が西に沈んで、西の空が夕焼けで赤くなります。夕日に映える水面も光るようにピカピカしています。

しかし、冬の朝、そのような綺麗な紀ノ川橋を通るのは自然との抗争だと思います。水面の上に強い風を吹くので、私は冷たい風に向かって一生懸命に自転車をこぎます。そういう時に、ロシアの作家ゴーリキーの「海燕の歌」という詩歌を思い出します。「今の私は風と争う海燕ではないだろうか」と思います。自分が「勇敢な海燕」と思っているのに、学校のベンチに横になりのんびりしている野良猫を見ると、そんな人生、いや猫生、羨ましいなあという気持ちが湧きます。

最近、和歌山が梅雨に入りました。雨の日が多くなってきます。ある雨の日、ある交通信号機の前に、フランス人のマッチュに出会いました。強い雨でも、彼はレインコートをきませんでした。大声で彼に「大丈夫？」と聞くと、「まあ、大丈夫。すぐ着いたけど」と答えてくれました。さすがフランス人、自然を感じるんだなあと思いました。その後、雨の日に、雨に降られても、マッチュを思い出して、「大丈夫だわ。これは自然と親密に接触する機会だわ」と自分を慰めます。

実は、和歌山で自然を感じるのはとても簡単なことだと思います。道の両側に名前も知らない花がいつも咲いています。自転車で乗っていても、立ち止まり、写真を撮り、出発することが多いです。誰かの家を通るときに、よく片付けられた庭を一見して、常磐の松やあでやかなバラや青石の板に切られる芝生の魅力に引きつけられます。一目で気分が明るくなりました。自転車で乗りながら、「きっと上品な奥さんがいるんだなあ」と推測します。

昨年10月末に、和歌山城の紅葉溪庭園へ紅葉を見に行きました。小さな湖が周りの紅葉に包まれます。緑の湖と赤い紅葉が互いに引き立て合い、中国唐代の詩人、白居易の詩句「日出江花紅勝火，春來江水綠如藍」を連想しました。

今年の4月も和歌山城へ夜桜を見に行きました。満開になった桜は明かりに照らされて、キラキラ輝いているように見えました。

村上春樹は「そしてそういった小確幸のない人生なんて、かすかすの砂漠のようなもの

にすぎないと僕は思うのだけれど」と述べています。私もそう思います。冬の晴れる日、通学途中の景色、出会った面白い人、毎日咲いている花……それぞれが全て私の留学する生活の「小確幸」だと信じています。そのような小確幸があるので、私の留学の生活は夜桜のようにキラキラ輝いています。

